

第54話（32頁） 種をまかないと

お百姓が畑に種をまくときに、一箇所ぬかしてしまいました。麦が大きく育ってみると、一箇所ぽっかり空き地ができました。刈り入れがはじまると、おばさんたちは空き地をさけて通りました。空き地は泣いて言いました。「どうして、ぼくをさけて通るの？」

「とても短い話だね。でも、というか、だからこそ、『????』と、疑問がいっぱい子どもたちの頭に浮かんでくるんじゃないかな。」

「そう思って、どういう反応が予想されるか、近くの小学校の先生と1年生に聞いてみたら、想像した以上だった。」

「お百姓さんは何人で種まきしたの？って、いきなり質問されて、こっちがびっくりした。何気なしに一人かもしれないと思っていたけど、そんなはずないじゃないか、と切り返されちゃった。」

「畑はどのぐらいの広さなの？ どうやってまいたの？ 何時間かかったの？ と、次々に質問が浮かんでくる。そして、肝心なのは、どうして一箇所抜かしてしまい、ぽっかり空き地ができたのか、だね。」

「大勢でやったから、誰かが蒔いたはずだと思いこんでしまった。やっぱり、一生懸命やっていたいなかった。あとで蒔こうとして取っておいた。その場所の持ち主に嫌がらせするとか、別の目的があつてわざとやった……。子どもの想像力は尽きないんだ。」

「うーん。すごいなあ、子どもたちって。この話は、小さい子でも難しくないし、大きな子、さらには大人でも難しい。年齢によって、疑問の中身も箇所も違ってくる気がする。」

「後へいくほど、大人の疑問も膨らんでくるよ。」

「『刈り入れがはじまると、おばさんたちは空き地をさけて通りました』。このところで、どうして？と立ちどまってしまう。手が足りなくておばさんたちもお百姓と一緒に刈り入れを手伝っているのだろうが、収穫物がない空き地なら目もくれなくて当然だ。」

「なるほど。おばさんたちは通行人で、刈り入れとは関係ない、と最初にそう読んだのだが、それじゃやっぱり変か。」

「避ける、という言葉には、わざわざ、というか、意図的な気持ちがこもっている。どうして、そこまでかわりを持とうとしなかったのか、と不思議だ。」

「なにか、空き地（の土地）が悪いことをしたの？ 地面のせいじゃなくって、種を蒔かなかった人のせいじゃないか。こんなふうに子どもたちも受け止めていた。」

「そして、空き地が『どうして、ぼくをさけて通るの？』と泣いて訴える場面で終わっている。空き地を擬人化させているのは象徴的だね。強いメッセージがこもっている。」

「空き地は仲間はずれにされたと思って泣いたのかな。いまの子どもたちの世界に置きかえると、『いじめ』とか『しかと』に通じるかもしれない。」

「大事なのは、決して特定の結論を示そうとしないこと。読んだ人の数だけ読み方がある、そういうところが、このお話の際立った特徴じゃないかな。」

「この話の続きを書いてみようと子どもたちに持ち掛けたら、興味深いストーリーがいろいろ出てくるに違いない。」